

甲 田 遺 跡

—宅地造成に伴う発掘調査報告 (KD2022-1)—

2023. 5. 31 富田林市教育委員会

1. はじめに

宅地造成に伴う発掘調査である。調査地は石川の西岸の河岸段丘の縁辺に立地する。調査地は甲田遺跡の範囲の東端に位置し、南側の段丘の縁辺には水路と並行して東高野街道が通る(図1)。

甲田遺跡は縄文時代～中世までの複合遺跡で、周辺の既往調査では中世の遺構・遺物を多く確認している。調査に先立って実施した事前調査では、中世の遺構・遺物と、その下に古墳時代の遺物を包含する黒褐色粘質土層を確認した。そのため協議の結果、道路敷設部分に調査区を設定し、本調査をすることとなった。調査は2022年8月22日～10月21日までの実働37日間である。調査面積は219㎡で、掘削は最大G L-0.8mまで行った。

2. 調査成果(図2)

基本層序は6層からなる。G L-0.35mまでの耕土(I層)と床土(II層)の下は、0.15m厚の灰黄褐色砂質土の中世包含層(II-2層)、0.1m厚の褐灰～黄灰色砂質シルトに明黄褐色粘質土の灰

黄褐色砂質土の中世包含層(III層)、0.1m厚の褐灰～黄灰色砂質シルトに明黄褐色粘質土粒が混じる中世以前の包含層(IV層・IV-2層)、0.2m厚の黒褐色粘質土層(V層)である。V層は湿地状堆積で、調査区西側部分～中央部並びに北側部分で確認した溝状を呈す落ち込みの埋土である。その下はベース土層ないしは地山層で、G L-0.6～0.8mで検出した。北半部にはぶい黄褐色砂礫混じり粘質土(VI層)で、締まりが弱い。南側部分では河岸段丘の基盤層と思われる、明黄褐色粘土～にぶい黄褐色砂礫土(VI-2層)を検出した。

遺構面は2面で、IV層上面(第1面)とV層及びVI層上面(第2面)で確認した。後世の削平の影響が強く、検出段階で1・2面間の遺構に一部時期的な錯綜がみられたが、出土遺物をみる限り、古代末～中世前半の範中にとどまり、時代的に大きな差異はみられない。

第1面はG L-0.35～0.4mで検出した。中世前半の遺構面で、ピット66基、土坑3基、7条の溝を確認した。ピットには一定の方向性がみられるが、建物の復元はできなかった。溝は北側部分で検出した耕作溝で、南北方向のものと東西方向のものがある。主たる遺構としてはS X 58、S D 65、S K 43がある。

S X 58(図3)は調査区中央部南側ラッパ口付近で検出したピットで、径0.55m、深さ0.3mを測る。埋土はにぶい黄褐色礫混じり砂質土で、下方で須恵器鉢の口縁部片1点が出土した。ピット中央には土師器羽釜a(図6-2)を正置で据える。羽釜内の埋土は均質な灰黄褐～褐灰色中粗砂混じり粘質シルトである。羽釜内には別個体の土師器



図1 調査位置及びトレンチ位置図 (S=1/5000)

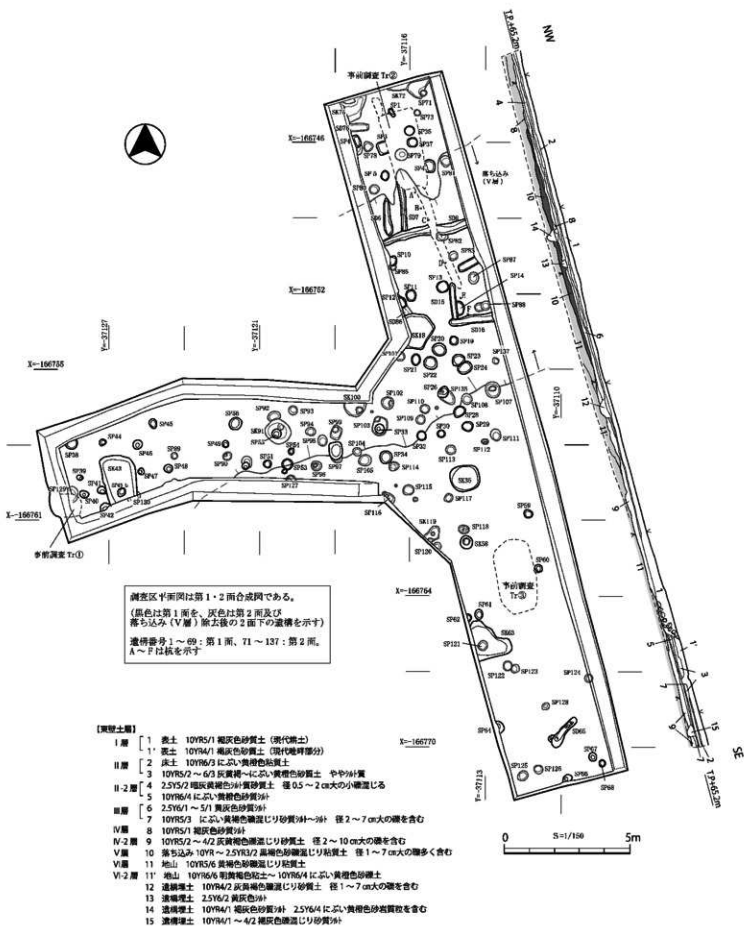


図2 調査区 平面図・断面図



1. 黒方堆土 10YR4/3 に近い黄褐色礫混じり粘質土
2. 土器内埋土 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
3. 土器内埋土 10YR4/1 雑灰色粘質土 (2層より粘性強い)

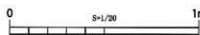
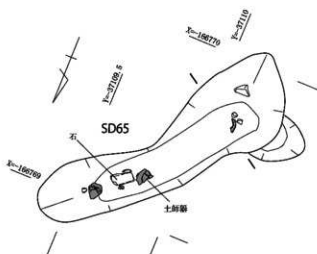


図3 SX58 出土状況図・断面図



TP+65.3m
NW SE

- 1 10YR4/2 灰黄褐色粘質土

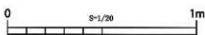
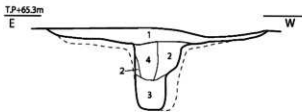
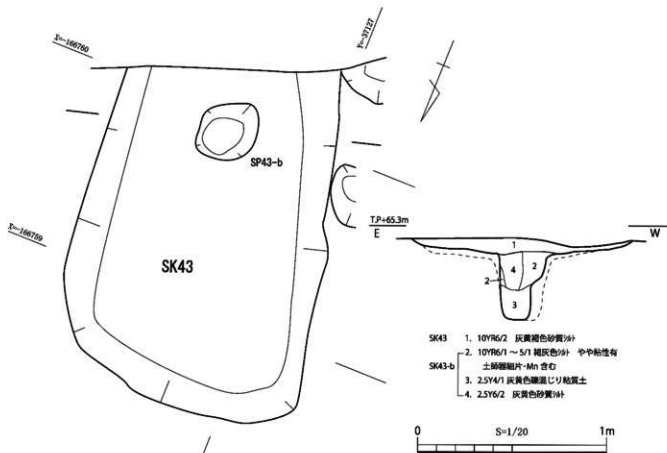


図4 SD65 出土状況図・断面図



- SK43 1. 10YR6/2 灰黄褐色砂質沙土
2. 10YR6/1 ~ S/1 雑灰色沙土 中や粘性有
土師器粗片・Mn 含む
- SK43-b 3. 2.5Y4/1 灰黄色礫混じり粘質土
4. 2.5Y6/2 灰黄色砂質沙土

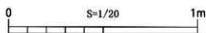


図5 SK43 及び SP43-b 平・断面図

羽釜 b (図6-1) の上半部の破片が 20 ~ 10 cm 程の数の大礫と共に落ち込んでいた。羽釜 a の口縁部~鏝上には羽釜 b の口縁部や鏝の破片が一部重なっており、羽釜 a の上に羽釜 b を逆さに被せていたと考えられる。後世の削平を受け、羽釜 b の下半は喪失したのであろう。羽釜の埋納状況から合わせ口の土器棺の可能性が窺えるが、直立した羽釜と羽釜を合わせた土器棺の出土例をみないこと、羽釜 b が遺構面より突出する凸状の遺構が推察されることから、羽釜内の礫との関係も含め、SX58 の性格は不明とせざるを得ない。

土師器羽釜 a (図6-2) はほぼ完形で、復元口径 27 cm、鏝径 29.6 cm、残存高 30.5 cm を測る。土師器羽釜 b (図6-1) は口径 26 cm、鏝径 29.2 cm、残器高 15 cm を測り、上半部のみ残存する。いずれもやや丸みを帯びた砲弾形を呈し、口縁の外反は弱い。胴部は外面にハケメを、内面全体に螺旋状にユビオサエを施すが、不規則な部分もある。生駒西麓産胎土で、9 世紀の所産であろう。SX58 下方で出土した須恵器鉢 (図6-3) も同じ時期のものである。

SD65 (図4) は調査区南側で検出した溝状の遺構で、長さ 1.45m、幅約 0.4m を測る。後世の削平を大きく受け、深さは 0.1m 未満である。幸うじて残った溝底で、古墳時代中期の土師器甕の体部と中世土師器小皿 (図6-4)、瓦器細片が出土した。土師器甕は図化できなかつたが、頸部直下~体部下半まで残存する。内面にケズリを施し、器壁は非常に薄い。布留式後半のものと思われる。

SK43 (図5) は調査区西側で検出した土坑で、南北 1.8m 以上、東西約 1.4m、深さ 0.1m を測る。隅丸長方形で皿状に窪む。断面図上では表現できなかったが、肩部に炭混じりの埋土が薄く溝状に堆積する。土師器灯明皿や瓦器碗が出土した (図6-5・9・11)。土坑最深部で径 0.3m、深さ 0.3m を測るピット SP43-b を検出したが、SK43 に伴うものなのか、下面の遺構に相当するのかわ不明である。瓦器碗 (図6-13) が出土した。

また、調査区中央部で検出した SP24 は径 0.5 m 程度のピットで楕円形を呈す。削平を受け、深さは 0.05m 程である。埋土は黄灰色粘質土とにぶい黄褐色シルトの混合土で、瓦器小片を含むが、

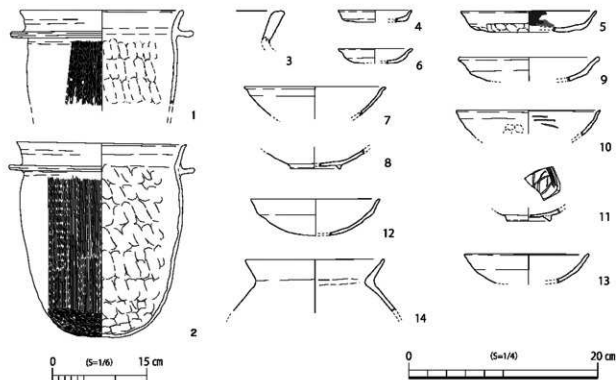


図6 遺構出土遺物

1~3: SX58 4: SD65 5・9~11: SK43 13: SP43-b
6~8: SP122 12: SP118 14: SP24

底面から古代の土師器甕片（図6-14）が出土している。

第2面はG L-0.5mで検出した。ピット59基、土坑4基、溝3条と杭列がある。第1面のベース土層には瓦器のほか、上面ではみられなかった黒色土器を包含しており、平安時代～中世初頭以前の遺構面と思われる。第1面同様多数のピットを確認した。建物の復元はできなかったが、一定の方向性は窺えた。S X 58の北側で検出したS P 118は楕円形のピットで、東西0.4m、南北0.3mを測る。削平を受け、深さは0.05m程である。瓦器塊（図6-12）が出土した。瓦器の時期から第

1面の遺構であった可能性も否めない。調査区南側で検出したS P 122は径0.4mの円形ピットで、深さは0.35mを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、多くの瓦器片（図6-6～8）や土師器片が出土した。

調査区西側～中央部にかけては、それ以前に堆積した黒褐色粘質土の、自然地形の落ち込み（V層）が東西方向に広がる。落ち込みでは杭列になりうる杭を6本（A～F）検出した。杭は角材または自然木を利用したもので、杭先は四角錐状ないしは三角錐状を呈すが、先端は打ち込みにより潰れている。いずれも0.2～0.3m下のVI層直上

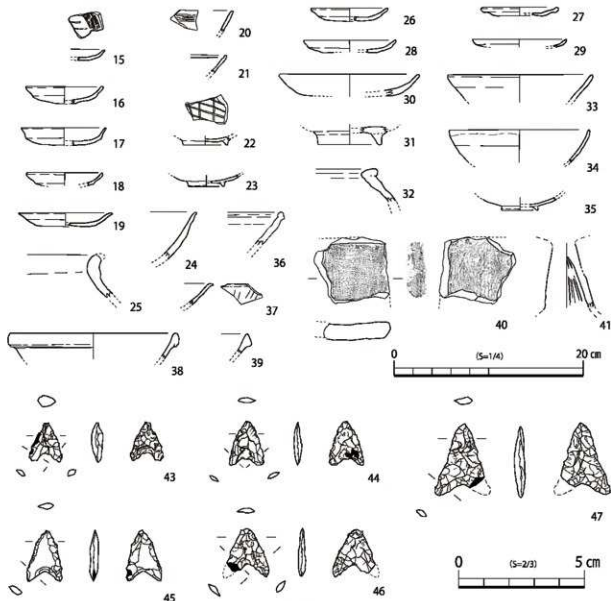


図7 包含層出土遺物

まで打ち込まれていた。

V層上部では中世の土師器坏や土師器ないしは瓦器坑(図7-33・34)のほか、古墳時代の土師器や須恵器、縄文時代の石鎌などを確認している。

遺物はコンテナ5箱分出土した。瓦器、土師器、須恵器、瓦質土器、黒色土器、瓦、陶磁器、サマカイト製の剥片や石鎌、鉄釘などを確認し、46点を図化した(図6・7)。遺構出土の遺物は少なく、その殆どが包含層から出土した中世の遺物で、古墳時代中期の遺物も少量みられた。

包含層出土遺物のうち、中世の遺物はⅢ層から出土した瓦器と土師器が大半である。瓦器坑は高台が踏ん張っているもの、三角形のもの、押しつぶされた形状のものが混在し、時期差がみられる。和泉型瓦器坑が殆どだが、大和型(図6-10・13)や楠葉型(図7-21)と思われる小片も数点みられた。瓦器皿は見込みに暗文があるものもある(図7-15)。瓦質土器は壺(図7-25)や盤または大型の坑と思われる小片(図7-24)を確認した。土師器は小皿・大皿(図7-26～30)や坑、鉢か大型の坑(図7-31)、羽釜(図7-32)などがある。このほか、中国製白磁(図7-37～39)や青磁の、碗口縁部や底部片が数点出土した。白磁のなかには焼成不良で、胎土がやや酸化し淡橙色をしたものもあった(図7-38)。また、須恵質平瓦片(図7-40)を確認した。中世の遺物は、いずれも12～13世紀の範疇におさまるものと思われる。

Ⅳ層の出土遺物の中には、10世紀後半～11世紀初頭の篠簞系と思われる須恵器銜鉢口縁部片(図7-36)や、10世紀後半の黒色土器A類坑の底部片(図7-35)がみられた。Ⅳ層及びV層直上からは古墳時代の遺物が出土した。須恵器坏部小片のほか、土師器甕、高坏脚部(図7-41)、布留式期の小型丸底壺の小片などを確認している。

石鎌は第2面直上の第1面ベース層及びV層で5点出土した(図7-42～46)。いずれも凹基式石鎌で、五角形鎌の傾向の窺えるものもある。縄文時代後期末～晩期初頭頃のものか。なお、縄文

土器と思われる小片も数点出土している。

3. まとめ

南側部分～東高野街道側にかけての様相は後世の削平を大きく受けてわからないが、当該地の積極的な開発は中世以降である。調査区西側～北側部分の地盤が礫層ではない部分で活発な利用がみられ、中世後半以降は耕地であったと思われる。後世の削平の影響を受け、中世の遺物と古墳時代の遺物が一緒に出土することが多く、各遺構面の遺構及び包含層から出土した遺物にも大きな変化はみられない。遺構面としては短期間の変化と推察され、12～13世紀末にかけて連続的に使用されたのであろう。その状況は周辺の既往調査地での包含層の在り方にも同じ傾向が窺える。甲田遺跡に均質に広がる砂質土～シルトの包含層は、中世前半段階の開発の過程において、礫のない耕作に適した土を客土といれた整地層の可能性が高い。第2面で確認した黒褐色粘質土層の落ち込みは、西側に隣接する2007年度調査でみつけた落ち込みから続くものと思われる。2007年度調査でも指摘しているが、今回検出した落ち込みの方向もまた、調査区北側の現行の水路の方向とも一致する。湿地状堆積を呈していた落ち込みは後世の水田開発の経緯の中で水路の敷設へと形を変えて機能し、開発に大きく影響したのではないかとと思われる。

第2面直上の落ち込み埋土や周辺では、ほとんど遺物がみられなかったが、古墳時代の土師器と須恵器片のほか、12世紀の瓦器坑片が出土し、縄文時代の石鎌も確認した。埋土の状況や周辺の既往調査から中世前半までほとんど土地利用されていなかったのであろう。ただ、古墳時代の明確な遺構はみられなかったが、出土した古墳時代の土師器や須恵器の状況から、近くに集落があったことが窺える。

参考文献

- 富田林市教育委員会 2008『甲田遺跡・赤志河遺跡発掘調査報告書』
- 富田林市教育委員会 2012『甲田遺跡―農地整備に伴う発掘調査報告書(2012-1)-』



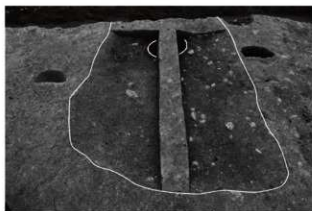
第1面全景 北東から



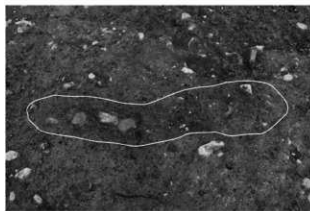
SX58 半掘状況 北から



SX58 羽釜a内出土状況 北から



SK43・SP43-b 掘削状況 北から



SD65 土器出土状況 北西から



第2面全景
北東から



第2面V層除去後
南東から

報告書抄録

ふりがな	こうだいせき		副書名	宅地造成に伴う発掘調査報告 (XD2022-1)				
書名	甲田遺跡		シリーズ名・番号	富田林市文化財調査報告80				
編集機関	富田林市教育委員会		編著者名	西村 雅美				
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL. 0721-25-1000(代)							
発行年月日	2023(令和5)年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
こうだいせき 甲田遺跡	とんぼびやし こうだいせき 富田林市 甲田一丁目	27214	43	34° 29' 45"	135° 35' 39"	20220822 ～ 20221021	219㎡	記録保存調査 (宅地造成)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
甲田遺跡	集落跡	中世	ピット、溝、 土坑、落ち込み	瓦器・土師器				

印刷 明朗社